

教えるより環境づくりを

言葉の能力が知能を決定することを実証したのはアメリカの人間工学研究所であり、それはすでに20年も昔のことです。しかし、それにしてはその教育はまことに変りばえがありません。

また、言葉の教育は幼児期が最も重要で、その最も基本的な能力は生後の、五年間に作られてしまうことが、世界のいずれの文明国でも実験によって明らかにされていますのに、親に対するこの面の啓蒙がどこの国でも余り熱心でないのはどうしたことでしょう。

1930年以來、アメリカでは多くの学者がチンパンジーに言葉を教える努力を払って来ましたが、チンパンジーはついに言葉を覚えることが出来ませんでした。チンパンジーは言葉が覚えられないので、何万年たっても少しも進歩がないのです。

言葉の習得こそ人類に許された切り札的な能力で、これを伸ばすことこそ何ごとにもまして重要な能力ですが、この能力も幼児期を外したら、どんなに教育しても出来ないことが、フランスの言語心理学者ポール・ショシャールの調査で明らかにされています。

フランスの黒人労働者の子供たちの知能指数が低く、フランスの文

化的な生活に適應しにくいのは、幼児期を黒人社会で生活し、言語能力が育たなかったためであり、フランスで生まれフランスの社会で成長した黒人の子供は完全なフランス語を覚え、それを語る能力を身につける。そういう黒人の子供はほとんどフランスの子供と同じ高さの知能をもつことを、ショシャールは調査してこれを明らかにしたのです。

1920年、インドで発見された狼少女カマラのことについては、シング牧師の手記やゲゼル博士の著書がこれを精しく報じております。その中で最も感動的なのは、カマラが言葉を覚えるまでは人間的感情が全くなかったのに、言葉を覚えるにつれて、喜びや悲しみの感情が芽ばえ、やがて恥じらいの感情さえもつようになった、ということです。

言葉は人間の心を育む

言葉は人間の心そのものです。言葉を知らなかったカマラは人間の心を持たなかったのです。だから、妹のアマラが死んだ時、食事をするだけの元気を失ったのにもかかわらず、顔に悲しみの表情が全く見えず、涙一滴出さなかったのです。

それが言葉を覚え、使えるようになると、悲しい時には涙をポロポロとこぼすようになりました。正に言葉は人間の心を育て養うものです。

その言葉は、口を出た途端にこの世のものでなくなってしまう。どんなに立派な言葉でも残すことが出来ません。人類はどんなにか「言葉を長く保存したい」と願ったことでしょう。そして終に文字を発明しました。文字は消えることのない“目で見る言葉”です。

この“目で見る言葉”のお蔭で、私たちは偉大な釈迦、キリスト、孔子の言葉を今聞くことが出来るようになりました。だから、人類は文字を発明してからの数千年間に、それ以前の百千倍もの長い期間にもなかった驚くほどの進歩が遂げられたのです。

文字のお蔭で、いつどんな時代の、どこの国のどんな人の言葉でも聞くことが出来るので、その貴重な体験を僅かな時間に自分に取り入れることが出来、自分を高めることが出来るようになりました。誠に有難いことです。

しかし、それも文字がよく読めての話で、文字が読めないことにはどんなに有難い本でも“猫に小判”です。わが国の文字は漢字です。だから、漢字力を養うことが何にもまして大切なのです。

その漢字力は、言葉と全く同じで、幼児期にこれを養い育てなかつ

たら、あとでどんなに努力しても手遅れです。漢字力をつけるには別に難しいことはありません。

幼児が両親の会話を耳にしている間に、ひとりでの言葉を覚えるように、漢字も、これを特別教えてやるのだという意識をもつ必要は全くありません。幼児は漢字を知りたがっています。だから幼児の目の届く所に漢字が沢山あり、親がこれを声を出して読んでいれば、幼児はひとりでの漢字を覚えます。教えてやるうとすれば、かえって拒否し、覚えないものです。

“学習”と“勉強”の違いは、課せられた学習を“勉強”と言い、勉強では学習効果は上がりません。“学習”は自分から望んでするものであり、こうして身についたものが真の能力になるのです。

ところが、親の情は“学習”が待てないで、わが子に“勉強”させます。また“助長”します。親のその気持が強ければ強いほど、逆に効果が薄れ、その上悪い副産物がつきます。

幼児は本来好奇心が強く、何ごとによらず知りたがっているのですから、強制する必要は全くないのです。好奇心をそそるような配慮が大切です。そういう配慮をせず、頭から教え込もうとする親は浅慮という他はありません。